

高岡市埋蔵文化財調査概報 第53冊

## 東木津遺跡 調査概報 II

—— 整形外科医院の建設にともなう発掘調査 ——

2003年8月

高岡市教育委員会

## 序

東木津遺跡は、高岡市泉ヶ丘の北側に位置する遺跡です。同遺跡におきましては、これまでにも多数におよぶ発掘調査が実施されており、掘立柱建物の他、硯や木筒、あるいは墨書き土器などといったものが検出されております。

今回は、この遺跡のなかでも西端部にあたるところを調査し、「助郡」と解しる墨書き土器をはじめ、さまざまな遺構や遺物が出土しております。

東木津遺跡は、周辺地域の歴史をひととくうえでも大変重要な遺跡です。したがって、高岡市教育委員会としましても、同遺跡には大いに注目をするとともに、この保護を行ってまいりました。

なお、今回の調査については、整形外科医院の建設にともなうものであるため、開発者である田中豊也氏からは、多大なご理解とご協力をいただいております。末尾になりましたが、心より、感謝を申し上げます。

平成15年8月

高岡市教育委員会

教育長 細呂木 六良

## 例 言

1. 本書は、田中医院の建設工事にともなう東木津遺跡の発掘調査概報である。
2. 当調査は、高岡市教育委員会・田中豊也氏・株式会社中部日本歴業研究所の3者間で協定をとり交わして実施したものである。
3. 調査地区は高岡市佐野845-1・846・847-1番地に所在する。
4. 調査は平成14年12月17日から平成15年8月31日まで行った。
5. 調査関係者は以下のとおりである。

高岡市教育委員会

文化財課

課長： 大石 茂

課長補佐： 天谷陣夫（～平成15年3月31日）

副主幹： 木林弘吉（平成15年4月1日～）

主任： 根津明義

㈱中部日本歴業研究所

代表監修長： 津嶋春秋

考古事業部長： 西井敏夫

主任調査員： 中井英策・新宅輝久

調査員： 藤田慎一

6. 調査は高岡市教育委員会の指導のもと、㈱中部日本歴業研究所が行った。
7. 墓書上器の解説にあたっては、富山大学人文学部助教授の鈴木景二氏から有益な御教示をいただいた。
8. 本書の執筆については、序章の「調査にいたる経緯」は高岡市教育委員会が担当し、それ以外を新宅が行った。
9. 調査参加者は次のとおりである。

【屋外調査】

石田敏行 岩瀬政顕 岩崎木吉 黒山忠明 竹内喜三 高嶋輝雄

馬道弘一 岩山行雄 堀田 肇

【室内調査】

加藤由美子 加治久美 北川泰子 真田恭子 高橋英吏子 新田三喜子 橋井理子

高岡市埋蔵文化財調査概報 第53冊  
東木津遺跡 調査概報Ⅱ

## 目 次

### 序 章

遺跡周辺の歴史的背景	1
從来までの調査成果	4
調査にいたる経緯	4
基本層序	4

### 第二章 検出遺構

掘立柱建物	5
道路遺構	5
土坑	5
溝状造構	6

### 第三章 出土遺物

須恵器	6
土師器	7
墨書き器・ヘラ記号	7
土鐘	7

### 第四章 考察

田中医院地区について	20
「助郡」墨書きについて	20

### 挿 図

第1図 東木津遺跡の周辺における遺跡地図 (1/40,000)	1
第2図 東木津遺跡における過年度までの調査区 その1 (1/2,000)	2
第3図 東木津遺跡における過年度までの調査区 その2 (1/2,000)	3
第4図 基本層序略図	4
第5図 東木津遺跡田中医院地区 調査区全体図 (1/300)	8
第6図 掘立柱建物 S B 1 平面図及びエレベーション図 (1/60)	9
第7図 掘立柱建物 S B 2 平面図及びエレベーション図 (1/60)	10

第8図. 道路遺構及び掘立柱建物 配置図 (1/200)	11
第9図. 断状遺構・平面図 (1/200)	12
第10図. 遺構内出土の須恵器 実測図 (1/3)	13
第11図. 遺構内出土の須恵器 実測図 (1/3)	14
第12図. 遺構内出土の須恵器 実測図 (1/3)	15
第13図. 遺構内出土の土師器・墨書き土器・ヘラ記号土器・土錐 実測図 (1/3)	16

## 表

第1表. 遺物観察表	17
------------	----

## 図 版

- 第1図版. 調査区全景 (北から)
- 第2図版. 道路遺構S F 1・2・3全景 (南から)
- 第3図版. 掘立柱建物S B 1全景 (南から)
- 第4図版. 掘立柱建物S B 2全景 (南から)
- 第5図版. 道路遺構S F 1 (SD 1) 遺物出土状況近景
- 第6図版. 道路遺構S F 1 (SD 1) 遺物出土状況 (北から)
- 第7図版. 道路遺構S F 1 (SD 1) 遺物出土状況全景 (北から)
- 第8図版. 道路遺構S F 1 (SD 1) 遺物出土状況近景
- 第9図版. 道路遺構S F 1 (SD 1) 遺物出土状況全景
- 第10図版. 上坑S K60全景 (南から)
- 第11図版. 出土遺物
- 第12図版. 出土遺物

## 序 章

### 遺跡周辺の歴史的環境

東木津遺跡は、小矢部川と千保川の浸食によって段丘化した「佐野台地」の縁辺部に位置する。周辺で確認されている遺跡の内容から勘案するに、この周辺では、古くは縄文時代後期から人々の暮らしが始まったものと考えられる。その後は若干の空白期間をはさんだようであるが、弥生中期から近世にいたるまでの間は、連続と先人たちの生活が継続されたことが確認されている。

東木津遺跡の周辺には、下図のように多数の遺跡が密集しているが、特記すべきものとしては、その南西に位置する石塚遺跡が挙げられよう。石塚遺跡は、富山県内においては弥生中期の様相をもつ数少ない遺跡としても知られているが、周辺の遺跡群のなかにあっては、上記したすべての時期の様相が確認されているという点でも注目に値すると思われる。また同遺跡については、弥生時代に方形周溝墓を主体とする墓域が形成されていたが、つづく古墳時代においては前方後方墳（または前方後方形周溝墓）なども築造されるようになる。したがって、これらのことと総括するならば、周辺には在地的な様相が根付いていた可能性があると思われる。

なお、この周辺をめぐっては、東大寺領模田荘が所在したとする意見がある。東木津遺跡からは、いまのところ莊園や郡衙の関連とされる遺跡から出土する傾向にある種子札木箋や「庄」墨書き土器が出土しているだけに、これとの関係も見逃せない状況にあると思われる。

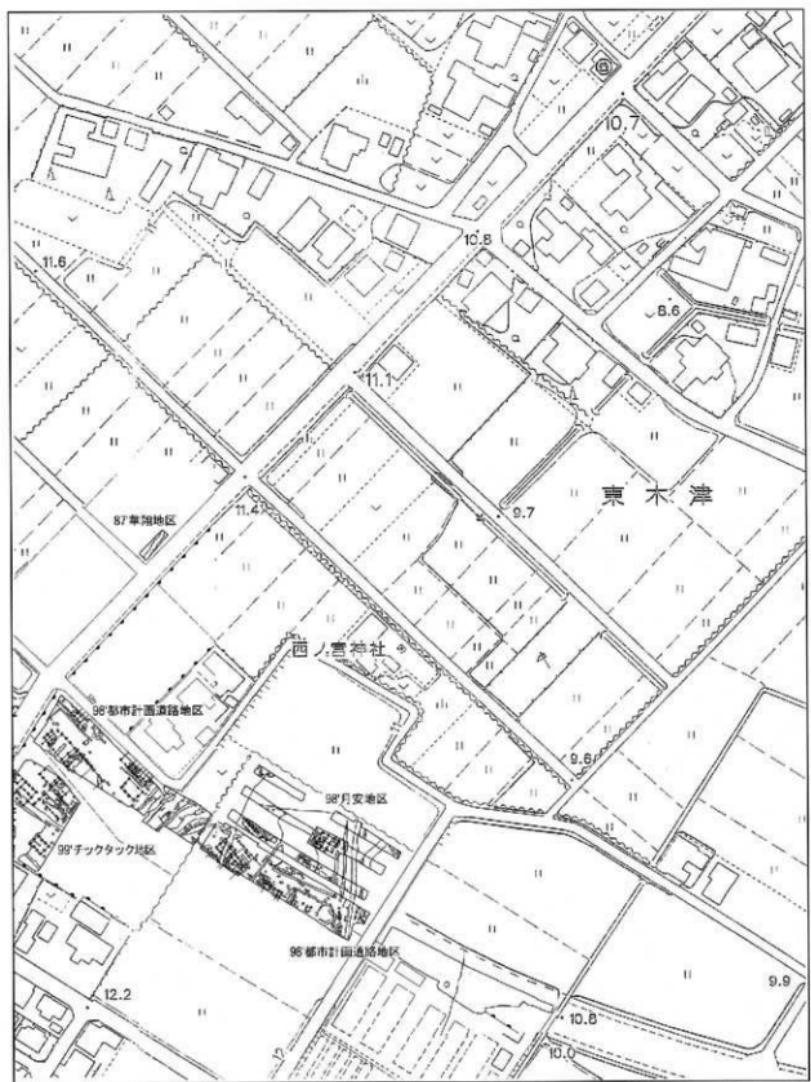


図1. 東木津遺跡の周辺における遺跡地図 (1/40,000)

- 1 東木津遺跡 2 石塚遺跡 3 中保B遺跡 4 石塚江之戸遺跡 5 上北島遺跡 6 木津神社遺跡 7 下佐野遺跡  
8 諏訪遺跡 9 石名瀬B遺跡 10 石名瀬A遺跡 11 西佐野千代遺跡 12 辻南遺跡 13 辻遺跡 14 桶詰遺跡  
15 中保A遺跡 16 中保C遺跡 17 小竹B遺跡 18 小竹C遺跡



第2図 東木津遺跡における過年度までの調査区 その1 (1/2,000)



第3図 東木津遺跡における過年度までの調査区 その2 (1/2,000)

## 從来までの調査成果

東木津遺跡においては、これまでに多数に及ぶ発掘調査が行われている。すでに同遺跡からは掘立柱建物が20棟（推定を含む）ほど検出されているが、これらについては、「月安地区」から「チックタック地区」までの地點に集中する傾向がみてとれる。

高岡市教育委員会の見解によれば、検出された掘立柱建物の多くは8世紀後半から9世紀前葉までのものであり、かつ24～40m<sup>2</sup>の平面積を有する「中壇建物」が主体をなすという〔高岡市教委2001〕。建物の軸方位を類別するならば、概ね5群に分類することが可能であるが、多くは北西方向へ平行に向いている。また、その配置についても連棟する傾向があったとみられるため、これらの造営にあたっては、規格性のあった可能性がある。

東木津遺跡においては、文字史料や祭祀関連などといった一般集落跡とは縁の薄い遺物が多数出土している。特に文字史料の豊富さと宗教関係遺物の出土はこの東木津遺跡の特徴ともいえ、また同遺跡の歴史的性格を考えるための重要な材料になると考えられる。

なかでも特筆すべき遺物としては、「氣多大神宮寺（川崎説）」木簡や種子札木簡などが出土しており、前者については、同神宮寺に涅槃淨土への往来を祈願するため、何らかの奉納物をおさめたことが記されており、また後者については、東木津遺跡が物流の渦中にあったことをしめす可能性がある。さらに、この遺跡からは多数の祭祀関係遺物も出土しているが、「悔過」墨書き器や瓦塔などのような、仏教との関連をおもわせるものも出土している。これらについては、この遺跡の性格を問う上で、注目に値すると思われる。

## 調査にいたる経緯

今回の調査は、田中豊也氏が高岡市佐野845-1外の地に整形外科医院の建設を計画し、埋蔵文化財にかかる照会を寄せたことに端を発するものである。しかし、当該地は東木津遺跡の包蔵地として周知されていたことから、さしあたり試掘調査を実施し、この結果をふまえたうえで以後の対応を検討することとした。

その結果、当該地からは多数の遺構や遺物が検出され、一定の範囲にかぎっては、開発行為を行う前に本調査を実施する必要性が生じることとなったが、この事例については、さまざまな事由から調査の着手にいたるまでには一定の行政的経過をふむ必要があった。

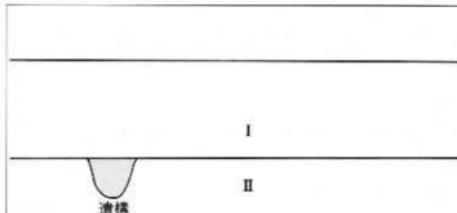
しかしながら、田中氏からは早急に開発をすめたいという意向が出されたため、田中氏と高岡市教育委員会、それに調査委託業者の3者協定のもとに調査を行うことで事態の打開をはかるとしたが、その後、この3者の合意を得ることができ、調査を開始するにいたった次第である。

## 基本層序

今回の調査区においては、表土が25cm～30cmほど堆積していた。昭和30年代に実施された圃場整備によって削平を受けていたため、特に包含層は検出されず、表土直下で遺構確認面を確認した。

第Ⅰ層 耕作土

第Ⅱ層 黄褐色シルト



第4図 基本層序略図

## 第二章 検出遺構

### 掘立柱建物 SB 1

調査区の中央からやや南側に立地する、2間×2間の総柱構造を呈する掘立柱建物であり、軸方位は北から東方へ約10°傾く。その構造から倉庫として使用されていたものと考えられる。柱穴の深さは現状で30cm内外のものがほとんどであり、平面形は円形や梢円形を呈する。土層観察からは柱底等は検出されていない。

建物の配置は、道路遺構SF 1・2からつながるSD 38やSD 41などとほぼ同一方向に配されている。出土遺物がないため築造年代等は不明であるが、周辺からは8世紀後半代から9世紀代の遺物が出土しており、この範囲内に築造された可能性があると思われる。

### 掘立柱建物 SB 2

SB 1の東側に立地する。SB 1同様に2間×2間の総柱構造を呈し、倉庫として使われたものと考えられる。ただし、建物の主軸はSB 1よりもさらに15°東へ傾いている。

柱穴については、平面形が円形や梢円形を呈しており、また深さは、現状で15cm前後のものがほとんどである。土層観察からは、特に柱底等は確認されなかった。

### 道路遺構 SF 1～3

今回の調査区からは道路遺構を3条確認している。SF 1は両側溝間の心々距離で約3mを測る。東側の側溝(SD 1)の溝幅は約1mであるが、対する西側の側溝(SD 10・2・3・4など)については、0.6mとやや狭くなる。SF 2は両側溝間の心々距離で約5mをはかる道路遺構である。側溝の断面は概してU字形を呈する傾向にあるが、一部において連続的に土坑が重複する箇所がみられた。

この2条の道路遺構については、側溝が所々に途切れることから、後世の開発行為等によってすでに上面を削平されているものとみられる。したがって、往時の路面をあらわす硬面化面も見受けられないが、双方の側溝が同一点で屈曲し、かつ同一方向へと向かうことから、造り替えを経て2時期の道路遺構が検出されているものと考える。ただし、SF 1とSF 2の新旧関係については、重複部分がないため不明である。

SF 3は、上述したSF 1やSF 2の西側を並走する両側溝間の心々距離が1.5m(最大値)の道路遺構である。西側の側溝はSD 12とSD 112で構成され、幅約0.3～0.5mほどを有する。対する東側の側溝はSD 9とSD 102が該当し、幅も上記とほぼ同規模の約0.5mを測る。

なお、道路遺構を基準として、その東西の遺構の在り方を検討するならば、一般に東側においては遺構がほとんど所在せず、逆に西側では散状遺構などの規則性をもったものが所在する傾向にある。また、現状においてSF 3は西側が大きく開口しているが、この部分から西側にかけては遺構の密度がやや薄くなる傾向がある。この遺構の配置状況から、この周辺においては道路遺構が区画的な役割を果たしていた可能性があるのではないかと思われる。

### 土 坑

今回の調査区からは合計60基の土坑が検出されている。その多くは規則的に配置された形跡が痕われず、また、出土遺物もないものが殆どであった。平面形は方形や梢円形を中心であり、規模については長軸1.25m、短軸0.76m程度を平均値とする。

特記すべきはSK 60であろう。同遺構からは多量の遺物が出土しているが、覆土が水平に近い状態で堆積していたことなどから、土器は人為的に廃棄された可能性があると思われる。遺構の平面形は梢円形であり、底部付近は東側から西側へと緩やかに傾斜し、断面形は舟底状を呈する部分がある。遺構内から出土した遺物のなかに

は、先形に近いものが多く、主に8世紀後半から9世紀前半の須恵器が出土している。

#### 溝状遺構

今回の調査区からは多数の溝状遺構が検出されている。そのほとんどは道路遺構の西側において密集する傾向が見られるが、その配置形態からして多くは畠状遺構になると思われる。互いの切り合い関係や軸方位などからみて、2回程度の配備替えがあった可能性がある。

以下、畠状遺構をAからCまでの3群に分類して記述をすすめる。A群は、S F 1やS F 2とほぼ平行に、南北方向に立地するものである。また、これよりもさらに西方へ寄って立地するものをB群とし、上述の二者とは対照的に東西方向へとはしものをC群とする。

A群は、溝幅0.2m～0.4m、深さ0.5m～0.9m、全長は4m前後ほどの規模を有するものが殆どである。主に調査区の南側に集中している。B群については、溝幅が0.5m～1.0mとややA群より広くなる傾向があるが、深さはほぼ同様である。主に調査区の北側に集中している。C群については、全長が必ずしも一定せず、1m～5m前後のものがある。溝幅は0.4m～0.6mであり、深さは0.5m～0.9mであった。

遺構の配置状況をみると、道路遺構を意識した構築をしているものと思われる。また、C群が道路遺構S F 3と切り合っているが、屢々上の上質が類似していることなどが起因し、新旧関係は確認できなかった。

これらの溝からは9世紀代の遺物が出土している。

## 第三章 出土遺物

### 須恵器（第8、9、10図）

今回の調査区からは、8世紀後半から9世紀代の須恵器が出土している。その多くは道路遺構の側溝やS D 48の他、SK 60などから出土したものである。器種としては、蓋・壺A・壺Bなど食膳具の山上量が多い。貯蔵具の出土量は食膳具に比べると少ないものの、器種においてはこれより多種に及び、大甕をはじめ、壺類や瓶類などの貯蔵具が見られた。その他水滴などの文具も出土している。

蓋類は、擬宝珠の有無によって2類に分類される。器形は扁平形のものと、やや縁やかな頂部を持つものがある。端部は丸くおさめるものがほとんどである。

壺Aは、底部がクロヘラ切りであることで統一されているが、概ね口縁部の形状によって次の3類に分類できる。すなわち、口縁部が直線的に立ち上がるるもの、器高そのものが浅身を呈するもの、そして口縁部が内済気味に立ち上がりつつも、上位で角度を変えて口縁端部に至るものである。

壺Bは2類に分類しうる。一つは底部から口縁端部にかけて直線的に立ち上がり、高台部が内傾もしくは平行に接地する形態のものである。いま一つは、底部から口縁端部へ内湾しながら立ち上がり、体部上位で角度を変え、さらに外反して口縁端部に至り、高台部は内傾もしくは平行して接地するものである。なお、壺Bは口径についても二分され、口径15cm以上で器高6.4cm以上を呈する大型のものと、それ以下の規格の小型のものとがみられる。調整法は双方とも体部内外面にクロクナデを施す。大型壺Bのいくつかには体部に一条の沈線が巡るもののが見られる。また、高台部に強いヘラケズリ痕を横方向へ施して成形や調整を行うもの一部に見られた。

大甕は、口縁部から頸部にかけて「く」字に屈曲するものが多い。肩部から胴部にかけては、外面に小単位のタタキ痕があり、内面には同心円状の当て具痕が残る。

短頸壺は、口辺部がやや内傾しながら立ち上がるものが出土している。肩部はナデ肩となるが、胴部との境界部分に1条、胴部下半部には2条の沈線がそれぞれ巡っている。調整は胴部外面にロクロナデを施す。頸部の接合部分には段が巡る。口縁端部は内傾し、一段段を持たせている。

瓶類については、口縁部から頸部までの部分が出土した。口辺部には2条の沈線が巡り、端部外側には明確な段が巡る。

水滴は、把手及びその付近が出土したのみであるため、全体像を把握することは困難であるが、天井部の接合部分には閉塞痕が明確に観察できた。把手部分はヘラケズリによる調整が施されている。

食膳具については8世紀後半代から9世紀前半頃までの時期が与えられるが、9世紀中葉に位置すると考えられるものも若干量みられる。

#### 土師器（第11図）

今回の調査区からは9世紀代を中心とする土師器が出土している。このうちの多くは溝状遺構SD48から出土したものであるが、器種としては、壺Aや碗などの食膳具や、甕などの煮炊具などがある。

壺は、体部下半にヘラケズリが施されるものや、ごく少数だが外面に赤彩を施すものがみられた。底部は、ロクロヘラ切りが用いられている。口縁部については、内湾しながら立ち上がりつつも、その上位で角度を変え、外反するものがある。

壺は、底部周辺と口縁部に大きく黒斑の入るものなどが見られる。

甕は、図11に掲載した2015と2016以外は、口縁部が外傾し、端部に面取りを加えるという形状を呈するものである。2014は頸部の接合部分にカキメが残る。2015はやや口縁端部が丸くなり、巻き込み気味におさまる。2016は口縁部外面に1条の沈線を巡らすものである。体部外面と口縁部内面にはカキメが残る。

貯蔵具については、遺物番号2015などのように、口辺部の形態などが8世紀中葉にみられるものがあるが、使用期間なども考慮するならば、共伴する須恵器食膳具と同じ年代を与えられると思われる。

その他、高壺の脚部片が出土している。

#### 墨書き土器・ヘラ記号（第11図）

今回の調査区からは、墨書き土器が2点、ヘラ記号の入るものが1点出土している。前者への解釈については後述することとし、ここでは遺物の事実記載をすめていくこととしたい。

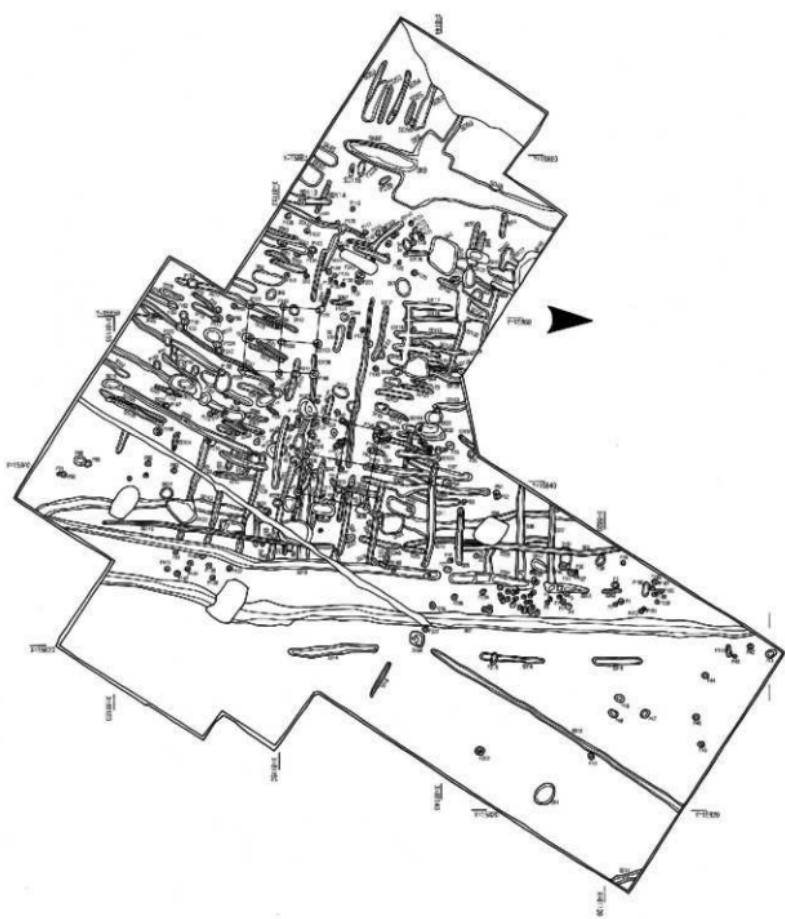
1071は頂部付近に「出中」と書かれた須恵器の蓋である。この文字は、東木津遺跡としては2例目の出土である。遺物そのものは頂部中位までヘラケズリが施され、そこから端部にいたるまではロクロナデが行われている。概ね9世紀前半頃のものと考えられる。

1072は底外面に「助郡」と書かれた須恵器の壺Aである。底部にはロクロヘラ切りの痕があり、体部にはロクロナデを施す。口縁部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部にいたる。「助郡」の解釈については後述することとする。

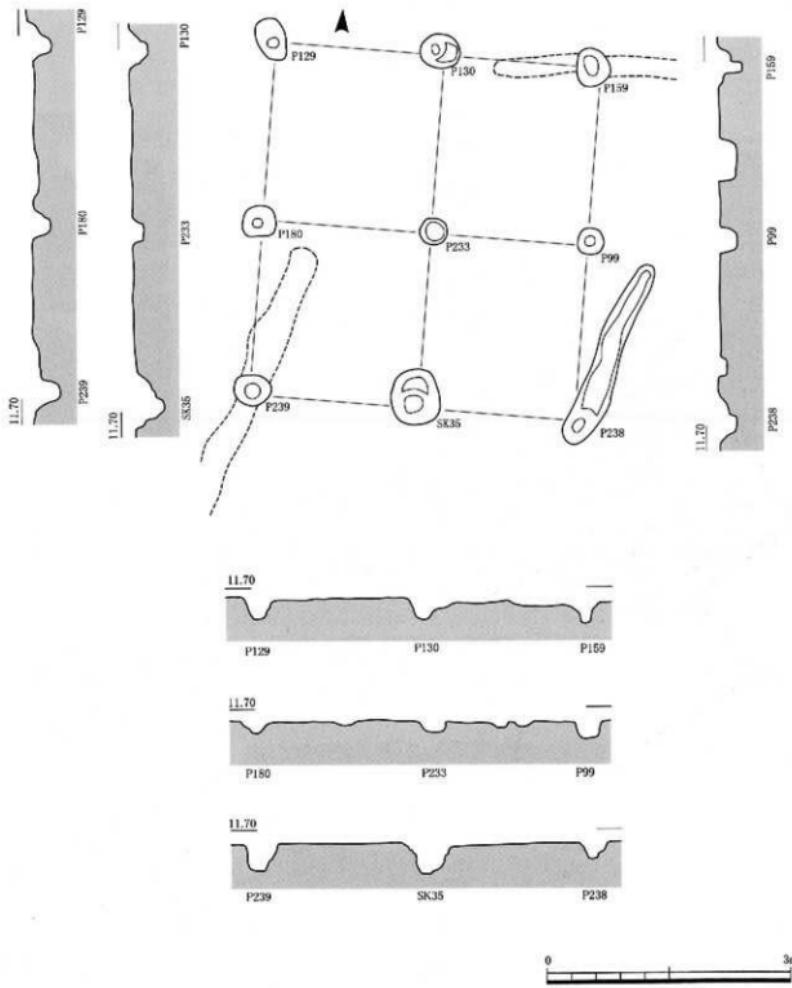
ヘラ記号を有する1073は須恵器の壺Bである。底部の中央に「+」を配する。遺物そのものは、口縁部が直線的に立ち上がり、高台部は内斜して接地するという形状を呈する。

#### 土鍤（第11図）

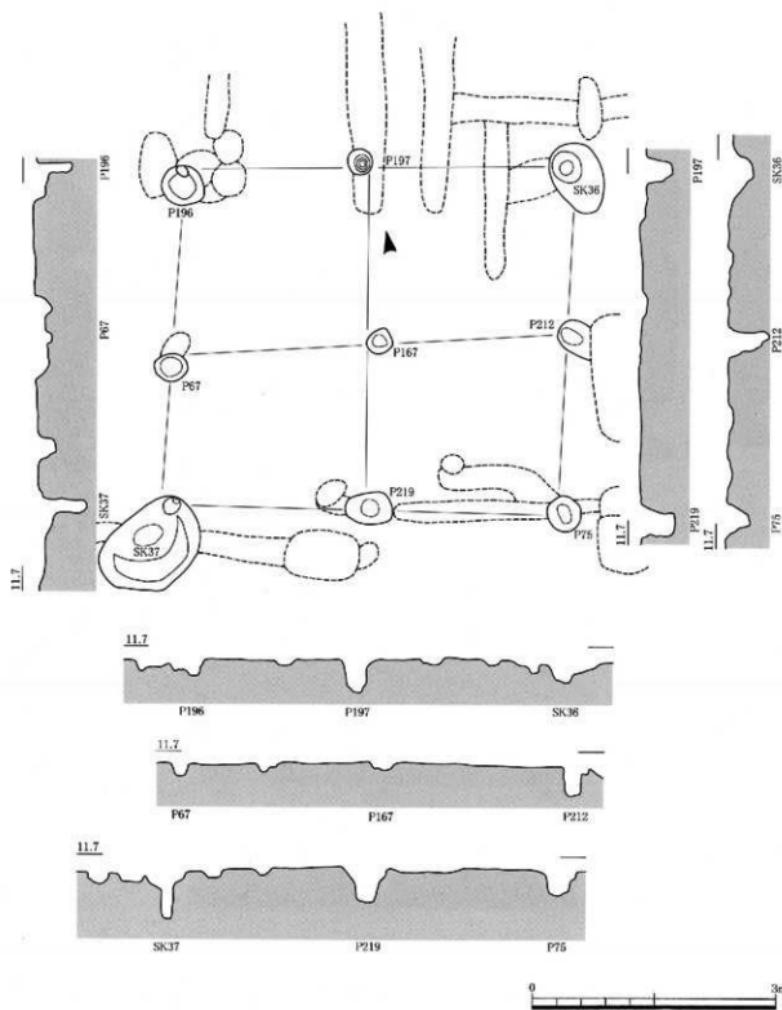
今回の調査区からは1点のみ上鍤が出土している。上下端にはヘラケズリによる成形痕が残る。表面には指頭痕が部分的に残っていることから、製作過程においては、手のひらで丸めるようにして成形したとみられる。



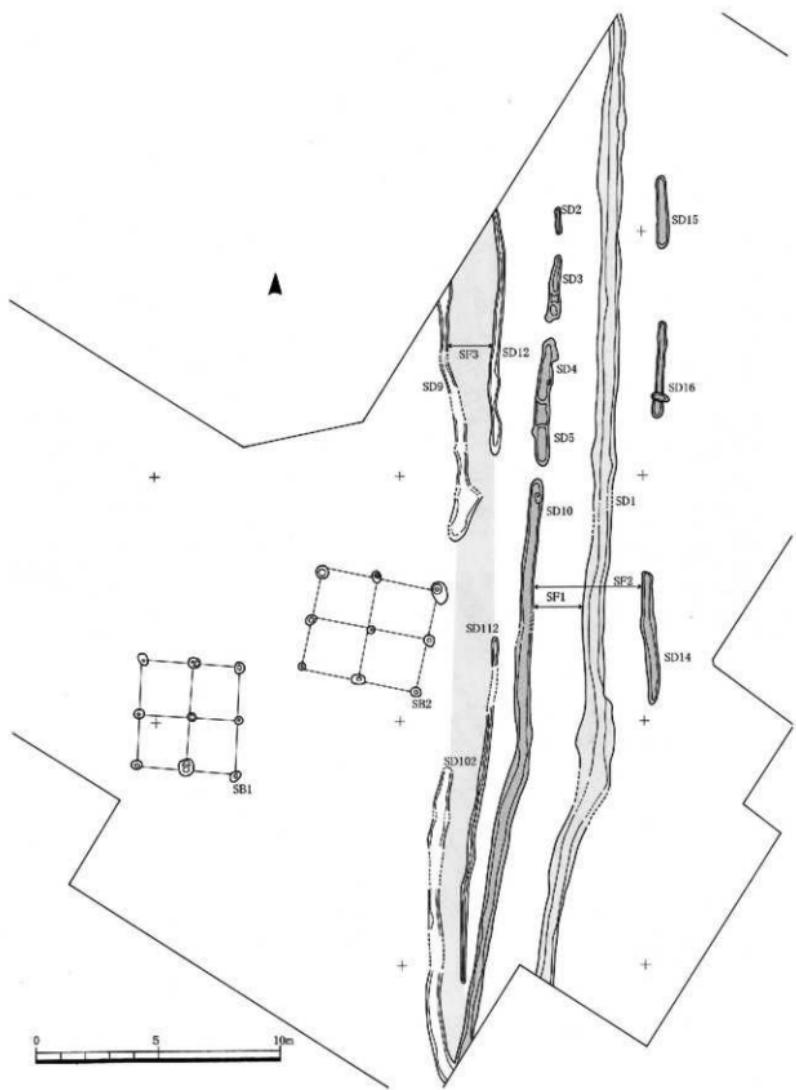
第5図 東木津遺跡田中医院地区 調査区全体図 (1/300)



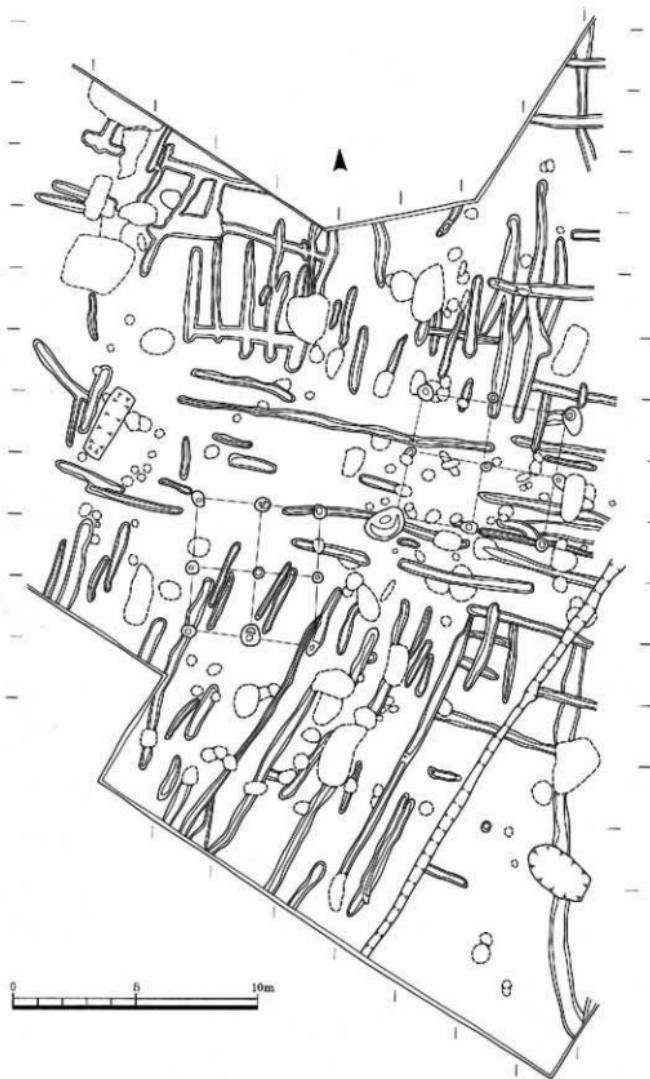
第6図. 振立柱建物SB 1 遺構平面図及びエレベーション図 (1/60)



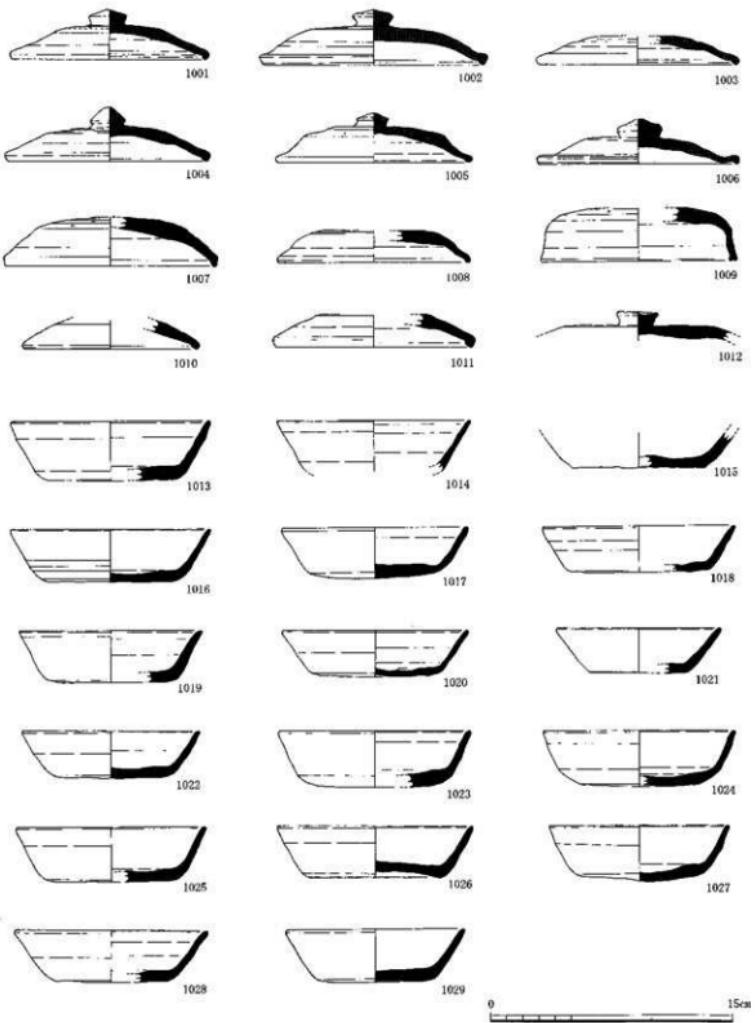
第7図. 据立柱建物S B 2 造構平面図及びエレベーション図 (1/60)



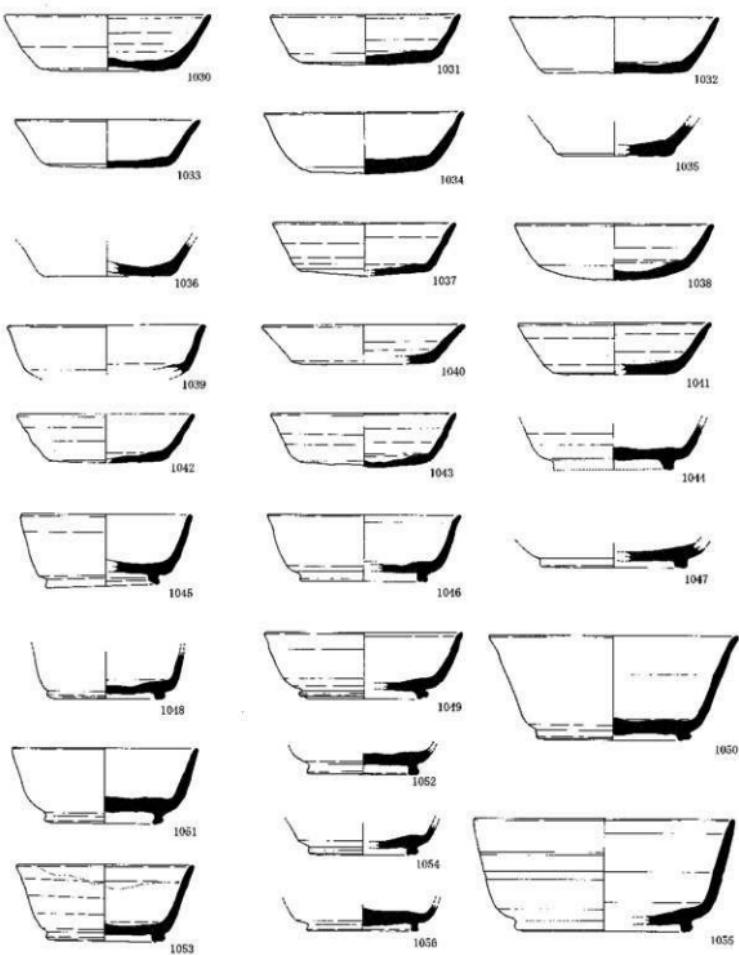
第8図. 道路造構及び埋立柱建物 配置図 (1/200)



第9図. 鉄状造構平面図 (1/200)

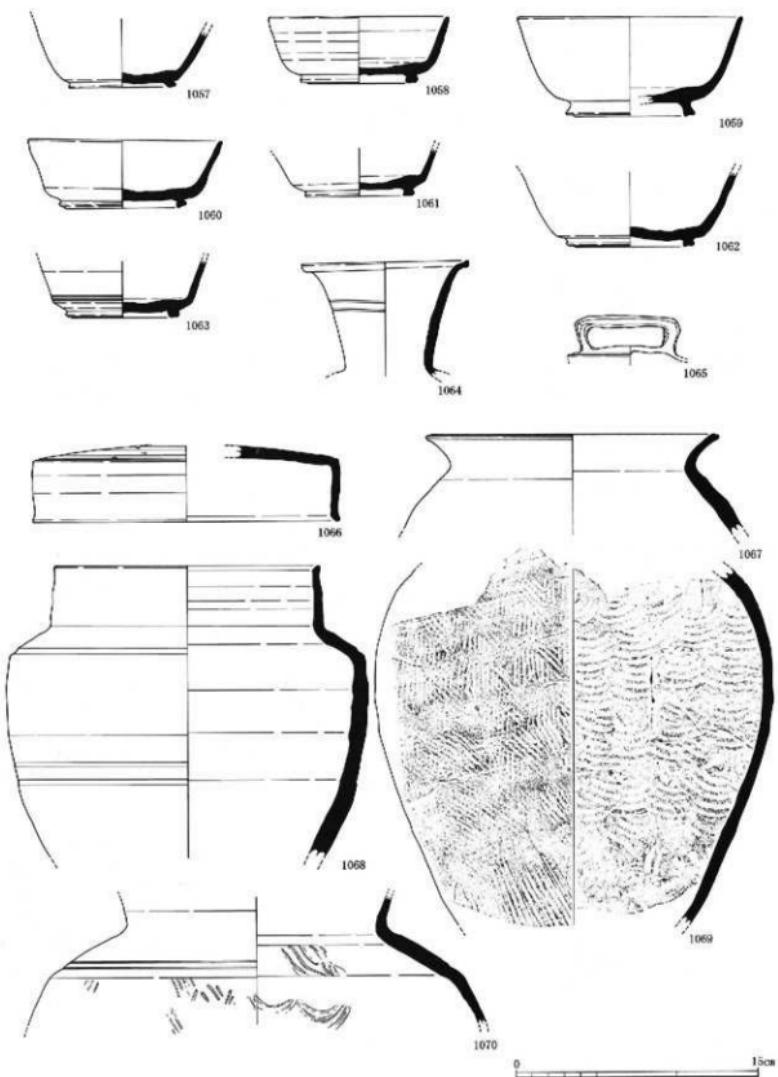


第10図、遺構内出土の須恵器 実測図 (1/3)

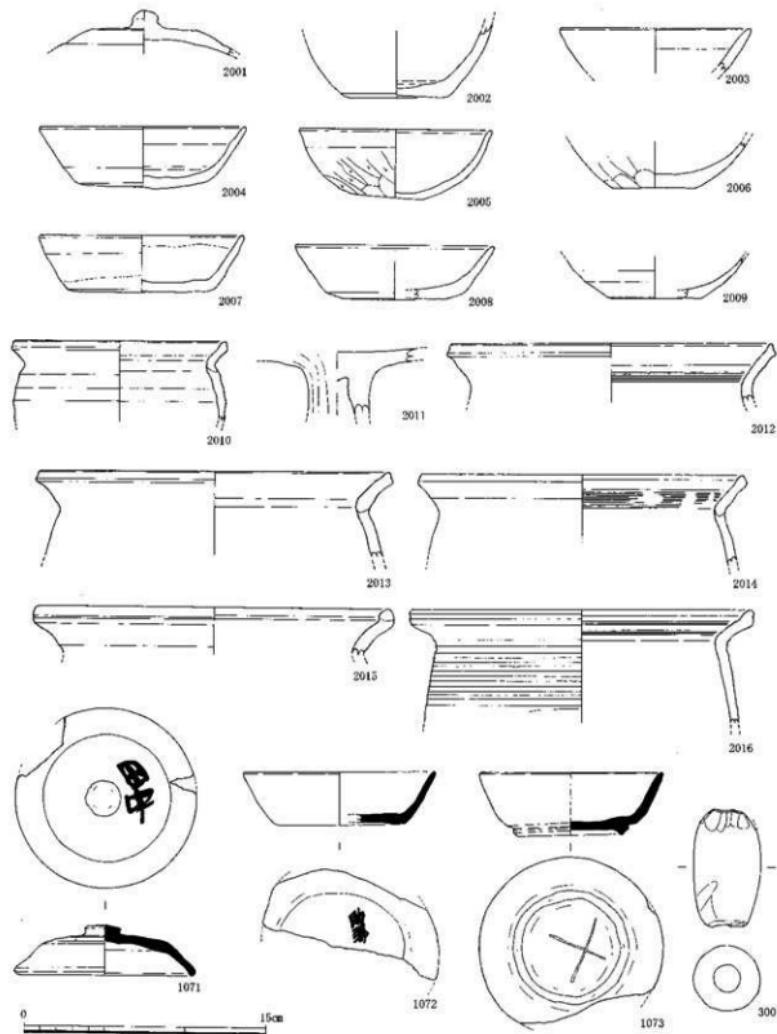


0 15cm

第11図 造構内出土の須恵器 実測図 (1/3)



第12図. 遺構内出土の須恵器 実測図 (1/3)



第13図 遺構内出土の土師器・墨書き器・ヘラ記号・土埴 実測図 (1/3)

表 1 茶物种列表

种名	俗名	科	属	种名	L. 变 (cm)	原变 (cm)	产地	形态	生态		生境		分布		经济		用途	
									外型	内型	灌木	草本	灌木	草本	灌木	草本	灌木	草本
1001 烟管茶	山茶	山茶科	山茶属	山茶	12.40	3.16	台湾	白色小叶 革质	—	—	灌木	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木
1002 乐昌茶	山茶	山茶科	山茶属	山茶	(12.00)	(3.00)	—	深绿色 革质	广椭圆	—	灌木	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木
1003 乐昌茶	山茶	山茶科	山茶属	山茶	—	—	—	深绿色 革质	广椭圆	—	灌木	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木
1004 乐昌茶	山茶	山茶科	山茶属	山茶	(12.70)	3.49	—	深绿色 革质	广椭圆	—	灌木	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木
1005 乐昌茶	山茶	山茶科	山茶属	山茶	(12.20)	3.06	—	深绿色 革质	广椭圆	—	灌木	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木
1006 乐昌茶	山茶	山茶科	山茶属	山茶	—	(1.70)	—	深绿色 革质	广椭圆	—	灌木	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木
1007 乐昌茶	山茶	山茶科	山茶属	山茶	(11.90)	(2.10)	—	深绿色 革质	广椭圆	—	灌木	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木
1008 乐昌茶	山茶	山茶科	山茶属	山茶	(12.10)	(3.30)	—	深绿色 革质	广椭圆	—	灌木	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木
1009 乐昌茶	山茶	山茶科	山茶属	山茶	(11.00)	(2.00)	—	深绿色 革质	广椭圆	—	灌木	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木
1010 乐昌茶	山茶	山茶科	山茶属	山茶	(12.10)	(3.00)	—	深绿色 革质	广椭圆	—	灌木	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木
1011 乐昌茶	山茶	山茶科	山茶属	山茶	(11.90)	(2.00)	—	深绿色 革质	广椭圆	—	灌木	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木
1012 乐昌茶	山茶	山茶科	山茶属	山茶	(12.00)	(3.00)	—	深绿色 革质	广椭圆	—	灌木	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木
1013 乐昌茶	山茶	山茶科	山茶属	山茶	(12.40)	(3.70)	(6.30)	深绿	—	灌木	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木	灌木
1014 乐昌茶	山茶	山茶科	山茶属	山茶	(11.00)	(2.00)	—	深绿色 革质	广椭圆	—	灌木	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木
1015 乐昌茶	山茶	山茶科	山茶属	山茶	—	(2.20)	(18.20)	深绿	广椭圆	—	灌木	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木
1016 乐昌茶	山茶	山茶科	山茶属	山茶	(11.90)	(2.30)	(1.40)	深绿	广椭圆	—	灌木	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木
1017 乐昌茶	山茶	山茶科	山茶属	山茶	(11.40)	3.20	8.10	深绿	广椭圆	—	灌木	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木
1018 乐昌茶	山茶	山茶科	山茶属	山茶	(11.00)	(2.00)	(0.60)	深绿	广椭圆	—	灌木	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木
1019 乐昌茶	山茶	山茶科	山茶属	山茶	(11.35)	2.20	—	深绿色 革质	广椭圆	—	灌木	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木
1020 乐昌茶	山茶	山茶科	山茶属	山茶	(11.60)	2.75	—	深绿色 革质	广椭圆	—	灌木	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木
1021 乐昌茶	山茶	山茶科	山茶属	山茶	(10.50)	2.40	(6.60)	深绿	广椭圆	—	灌木	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木
1022 乐昌茶	山茶	山茶科	山茶属	山茶	(11.00)	(2.00)	(5.00)	深绿	广椭圆	—	灌木	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木
1023 乐昌茶	山茶	山茶科	山茶属	山茶	(12.00)	(4.00)	(8.60)	深绿	广椭圆	—	灌木	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木
1024 乐昌茶	山茶	山茶科	山茶属	山茶	(11.20)	3.45	(8.90)	深绿	广椭圆	—	灌木	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木
1025 乐昌茶	山茶	山茶科	山茶属	山茶	(11.60)	(3.40)	(8.20)	深绿	广椭圆	—	灌木	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木
1026 乐昌茶	山茶	山茶科	山茶属	山茶	(11.50)	3.20	9.10	深绿	广椭圆	—	灌木	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木
1027 乐昌茶	山茶	山茶科	山茶属	山茶	(11.20)	3.60	8.10	深绿	广椭圆	—	灌木	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木
1028 乐昌茶	山茶	山茶科	山茶属	山茶	(12.00)	3.50	(7.90)	深绿	广椭圆	—	灌木	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木
1029 乐昌茶	山茶	山茶科	山茶属	山茶	(11.30)	3.40	(8.90)	深绿	广椭圆	—	灌木	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木
1030 乐昌茶	山茶	山茶科	山茶属	山茶	(11.20)	3.20	(7.90)	深绿	广椭圆	—	灌木	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木
1031 乐昌茶	山茶	山茶科	山茶属	山茶	(11.80)	3.60	(8.80)	深绿	广椭圆	—	灌木	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木
1032 乐昌茶	山茶	山茶科	山茶属	山茶	(12.00)	3.50	8.60	深绿	广椭圆	—	灌木	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木	台湾	灌木



三

## 第四章 考察

### 田中医院地区について

今回の調査区は約1,100m<sup>2</sup>の調査面積を測る。現状で周知されている包廃地の範囲にあっては西端部に該当するが、この近隣においては、ほとんど発掘調査が行われていなかったことから、遺跡の広がりなどを把握するうえでも興味深い地点であった。

調査の結果、掘立柱建物2棟をはじめ、道路状遺構3本、土坑60基、それに畝状遺構を形成する溝が多数検出された。掘立柱建物は、2棟とも2間×2間の規格を有する小規模な総柱建物であり、類例的には倉庫として機能したものと考えられる。立地からみて、道路遺構との関係が深いものと思われる。

道路遺構については、側溝の配列や形状などから3回の造営があったと考えられる。このうちのSF1については、SD1とSD10を側溝とする心々距離が約3mの道路遺構である。また、SD10と14を側溝にもつSF2については心々距離が約5mを測る。SF3とした道路遺構については、最大でも両側溝間の心々距離が1.5mにしか達しない。それぞれの新旧関係などについては不明確である。

土坑については、平面形が方形を中心としたものが多いものの、特に配置等に規則性は感じられない。遺物の出土が多かったのはSK60で、坪A・坪B・蓋などの須恵器が出土している。

道路遺構の北側には溝状遺構が集中している。方位は、東西方向に走るものと南北方向へと向かうものの2種類に分類される。ほとんどのものが同質の覆土をもつことから、切り合いなどは不明確であったが、南北方向のものが東西方向のものを切ることだけは判明している。出土遺物については、ごく少量が出土する程度であったが、SD49からは後述する「助郡」墨書き土器が川上している。溝の性格については不明なものが多いが、複数の溝が密集し、かつ平行にならぶものについては、畝状遺構となる可能性があると思われる。

今回の調査で出土した遺物は、おおむね8世紀後半から9世紀前半のものが中心であったが、一部に9世紀中葉以降にまで降ると考えられるものも見られた。特筆すべき遺物としては、「記した「助郡」や「田中」といった文字の書かれた墨書き土器であり、特に前者については、全国的にも貴重な文字史料といえるであろう。

### 「助郡」墨書きについて

次に「助郡」と書かれた墨書き土器について、考察を加えていきたい。

「助郡」という言葉の初現そのものは、中国の『三国志魏書卷16 鄭渾伝』にみられる。この場合の「助郡」とは、魏・呉・蜀の三国時代の軍制において、太守直属の軍隊とは別の、領地内における豪族の軍隊を統括する「助郡都尉」とふう官職の事と考えられ、この職は三国時代のみにとどまらず、六朝時代（宋・斉・梁・陳）にまで存在していたものである。

また、この遺物は9世紀前半代の須恵器の坪Aであり、東木津遺跡が一般集落とは異質な機能を有していたと思われる時期のものである。したがって、こうした溝中において当遺跡にもたらされたものと解することができよう。

この墨書きを理解するにあたり、次の2点を提示しておきたい。

1. 「助」の文字をもって、「補佐する」又は「補完する」などという意味にとらえるもの。
2. 『三国志魏書卷16 鄭渾伝』や『新校本宋書/志/卷十八志第八/禮五』などにみられるように、地方豪族の私的軍隊をあらわす可能性。

前者と解した場合、東木津遺跡それ自体が「郡を助ける」機能を有していたという意味あいを考慮することになるが、郡を助ける—すなわち補佐するということは、現的には郡の支配が及び、かつそれよりも下位に位置する存在ということになる。その場合は郷や里、その他郡クラスの有力者が自ら直接統治した地城を対象とする可能性を考えるべきかと思われる。

なお、東木津遺跡の周辺地域をめぐっては、『倭名類聚抄』に記される「布師郷」に比定する声もある〔堀沢2001〕。過年度の調査では、「氣多大神宮寺（川崎説）」の木簡の文面の中に「布師三口」という文字が見られるものや、「布忍（師）郷」と刻書された須恵器が出土していることから、今回出土した墨書き土器もまた「郡を助ける」という観点で、その下部組織にあたる布師郷を意味する可能性は考えられないものであろうか。

一方の後者の解釈については、今まで東木津遺跡から兵士の存在を示す考古学的資料（例えば鉄族・小札・鐵刀といった武器など）の出土が無いため、明確な判断を下せない現況にある。ただし、各団に配されている軍団の大少級には、郡司などの地方豪族が任用されることがあるとされている〔井上1978〕。また、延暦11（792）年には、それまで軍防令の規定に準じて、兵士を各団の軍団へ供出していたのを廃止し、郡司の子弟からなる小規模な軍団（健兒）が諸国に配されている。したがって、このような背景から、地方豪族が私的な軍隊をもつまではいかないまでも、軍団への関わりは十分に考えられるかもしれない。もっとも、上記したように、当地においては、具体的資料の出土を待って、さらに詳細な検討が必要であるものと思われる。

なお、ここで論じた2案は、あくまで可能性を述べたまでのことであり、今後この墨書きの意味や東木津遺跡の性格については、更なる議論を重ねていく必要があると考える。

#### 【参考文献】

- 井上光貞 「補注：軍防令」『日本思想体系 律令』岩波書店 1978  
池野正男 「越中における9世紀代の土器様相」『北陸の9世紀の土器様相』 1996  
池野正男 「射水丘陵における8世紀中葉の画期」『北陸古代土器研究4』 1994  
内田亜紀子 「越中における古代土師器の編年予察」『埋蔵文化財調査概要』 1997  
川崎 晃 「氣多大神宮寺木簡と難波津歌木簡について」『高岡市万葉歴史館紀要第十二号』 2002  
高岡市教育委員会 「石塚遺跡・東木津遺跡発掘調査報告」 2001  
堀沢祐一 「越中国の律令祭祀と官衙遺跡」『フォーラム 古代北陸の郡の成り立ち』 2001

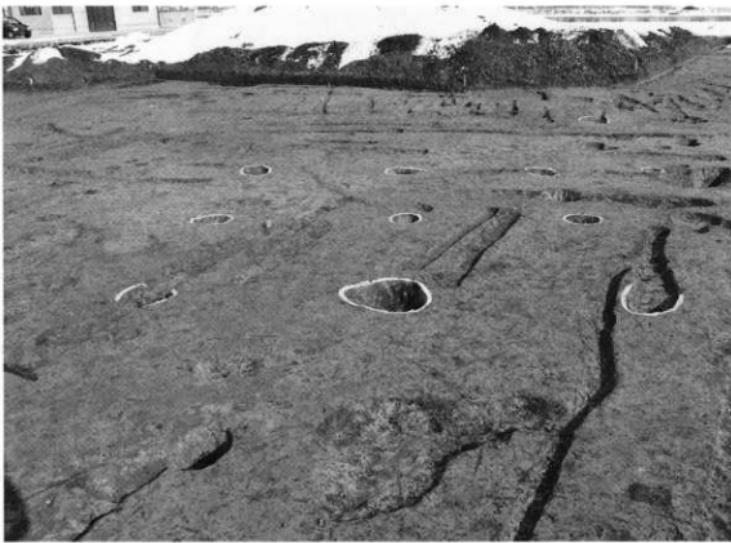
写 真 図 版



第1図版 調査区 全景（北から）



第2図版 道路構造 S F 1・2・3 全景（南から）



第3図版 挖立柱建物 SB1 全景（南から）



第4図版 挖立柱建物 SB2 全景（南から）



第5回版  
道路遺構SF1(SD1)  
遺物出土状況近景



第6回版  
道路遺構SF1(SD1)  
遺物出土状況（北から）



第7回版  
道路遺構SF1(SD1)  
遺物出土状況全景（北から）



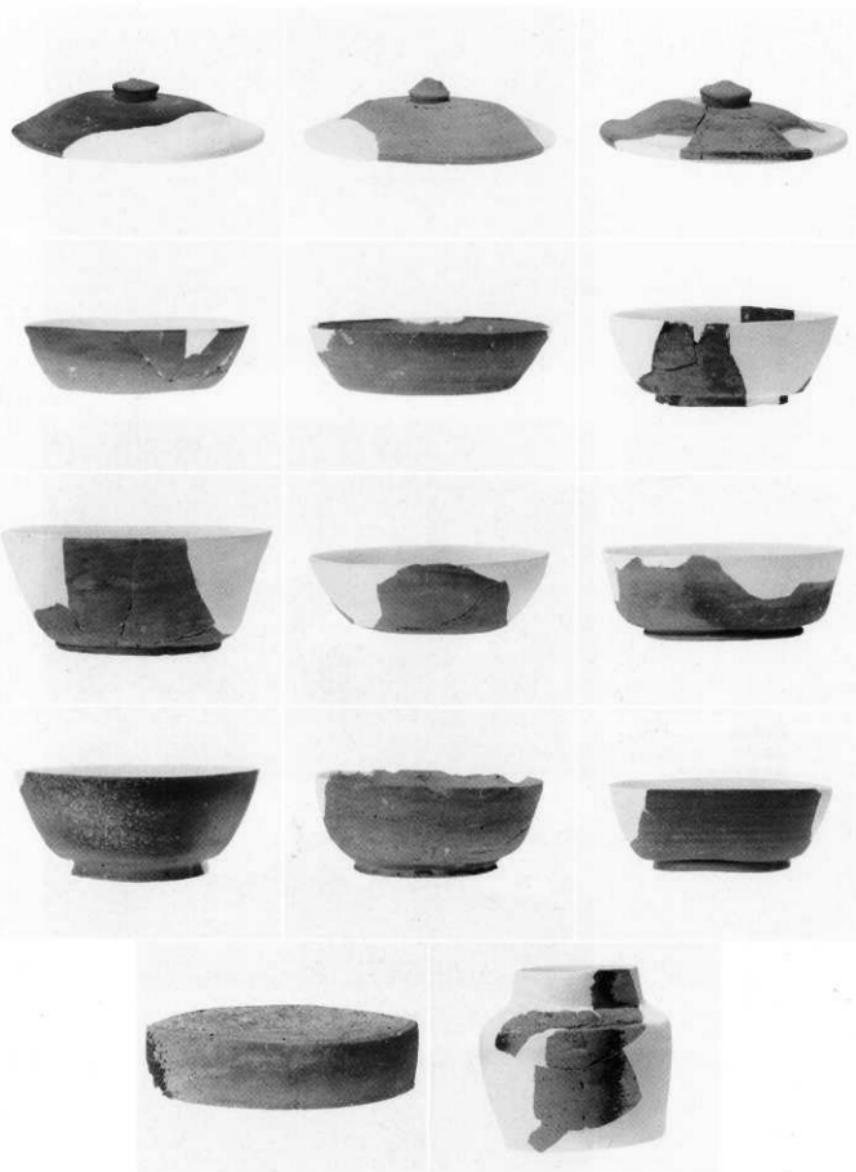
第8図版  
道路道構SF1(SD1)  
遺物出土状況近景

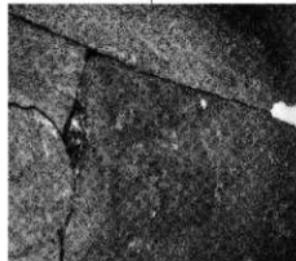


第9図版  
道路道構SF1(SD1)  
遺物出土状況近景

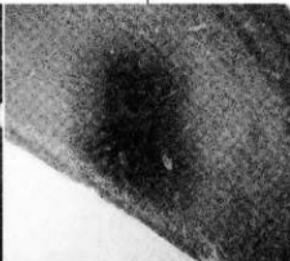


第10図版  
土坑SK60全景(南から)

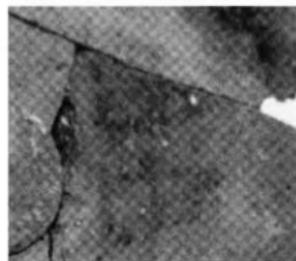




赤外線写真「田中」



赤外線写真「助郡」



墨書部分接写



墨書部分接写

## 報告書抄録

ふりがな	ひがしきついせき ちょうさがいほう							
書名	東木津遺跡 調査概報Ⅱ							
副書名	整形外科医院の建設にともなう発掘調査							
シリーズ名	高岡市埋蔵文化財調査概報							
シリーズ番号	第53冊							
編集者名	新宅輝久							
編集機関	高岡市教育委員会							
所在地	〒933-8601 富山県高岡市広小路7番50号 Tel0766 20-1463							
発行年月日	西暦2003年8月31日							
所収遺跡名	所在地	コ一ド		北緯 ° / ′	東経 ° / ′	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひがしきついせき 東木津遺跡 (田中医院地区)	富山県高岡市 佐野845-1・ 846・847-1番 地	016202	202150	36° 43' 52"	136° 59' 21"	0201224 ~ 0300831	1,155m <sup>2</sup>	整形外科医 院の建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
東木津遺跡 (田中医院 地区)	集落 官衙	奈良 平安	掘立柱建物2棟、 土坑60基、溝状遺 構、畝状遺構、そ の他ピット等	上飾器、須恵器、 黑色上器、墨書き 器				

高岡市埋蔵文化財調査概報 第53冊

### 東木津遺跡 調査概報Ⅱ

—— 整形外科医院の建設にともなう発掘調査 ——

発行者 高岡市教育委員会

富山県高岡市広小路7番50号

2003年8月31日

印刷所 キクラ印刷株式会社

富山県高岡市福島48-2